

## 貫之の「文體と表現意識」

——土左日記の文章を通して——

遠藤嘉基

### 論文の構想

- (一) 土左日記には、男子と女子との、二つの文體が交流している。それは、具體的にはどういふものか。
  - (二) この二つの文體は、無意識のうちになされたものか。それとも、意識的のものか。
  - (三) もし後者とすれば、そこに何らかの作者の意圖があるものと考えられるが、それは何であつたか。
- なお、ここに用いた文體という術語は、語彙・語法の面から設定したものである。

### はじめに

〈男もすなる日記〉、それは、身邊のできごとを漢字漢文(變體漢文)で記録するものであつた。そういう類のものを、紀行文ではあるが、いま〈女もしてみむ〉といふのである。當時の女性にとつて、漢字漢文は、原則としておよそ縁のない衆生でしかなかつた。<sup>①</sup>その女性が、日記を書いてみようといふのである。用いる文字は、當然ひらかなとならう。そのひらかなは、漢字と異なつて、自己の思いを自由に表現することのできる文字である。だから、〈女もしてみむ〉といふ、このことばの裏には、おそらくは、男の文字(漢字)だけでは盛りきれぬものを表わしたい、という願いが秘められてい

たにちがいない。

ところで、女性がひらかなで書くことばには、漢字漢文の地盤に育つた男子のそれとは、自然にまた異なるところがあった。〈女もしてみむ〉は、だから、それは文字だけではなく、ことばもまた女性のそれであることを語るもの、と豫想される。

では、土左日記の文章は、具体的に女性用語とみてよいか。

### 土左日記は、二つの文體から成立している

これを検討する方法としては、約七〇年の開きはあるが、後の源氏物語などと比較するのが、一般のならわしとされている。これは一つには、まさしく女性の手になつた作品と思われるもので、土左日記と比較対照するものが、同じ頃にないからであつた。しかし、嚴密にいえば、必ずしもないわけではない。断片的ではあるが、女性の手になつた日記として、大后御記<sup>②</sup>（醍醐帝の皇后穩子の日記・河海抄に引用）や京極御息所の假名日記といつたものが、土左記以前にあるので、これらを源氏物語などと共に、土左の文章とくらべてみると、大づかみにいつたところ、お互いの間に大した相違はみられぬようである。とすると、土左日記は、女性の側に立つて、女子用語で書いたものと、いちおう認めてよいことになる。

ところが、仔細にみると、女子用語とは思えぬものが用いられている。次に、例をあげよう。

〈動詞〉 くらふ（食）・心地あしみす（悪）・やぶる（破）

\*そのほか、うるふ（憂）・つつめく・聞きふける なども、この系統か。

〈名詞〉 おそり（恐）・かなしび・不用

\*そのほか、複合語としての、それのとし(某年)・いささけわざ・むかしへびと(昔人)など、この系統か。

〈形容詞〉 たたはし(滿)

〈副詞〉 たがひに・ひそかに・すみやかに・はなはだ・いまし(今)

\*からくして(辛)・まにまに(隨)も、この系統か。

〈助動詞〉 ごとし(如)・しむ(使役)・ざる(打消の連體形)・ら(完了の未然形)・れ(完了の已然形)

〈接續詞〉 しかれども・そもそも・ここに(茲)

〈中止法の語尾〉 ーくして(形容詞)・ーずして

〈特殊の表現形式〉 いはく……といふ・ーに似たり

\*そのほか、こぼれやぶる(毀れ破る)なども、この系統か。

いずれも、定家本<sup>④</sup>と清谿書屋本と一致している部分であるが、これらは、いわゆる訓點語(漢文および變體漢文を訓讀するときのことば)に屬し、後の、源氏物語などの、女性の手になつた文學作品には、原則として現われてこない用語である。ならば、土左日記に、この二つの系統の用語があることを、では、いかに理解したらよいか。(甲)女性の立場をとつて書いてはみたものの、もともと男性であつた爲に、無意識のうちに、ふと訓點語が用いられたとみるべきであらうか。(乙)それとも、作者に何らかの意圖があつて、訓點語が用いられたのだと考えるべきであらうか。

貫之は、意識的に二つの文體を用いている

まず、(甲)の立場を検討してみよう。その爲に、かなで書かれた、彼の他の作品(古今和歌集假名序と大井川行幸和歌序)と比べてみる。もつとも、これらが、貫之の作であるかどうかについては、確證があるわけではない。一般には、無條件に

認めているようだけれども。しかし、彼の作であることを否定する積極的な證據はなく、むしろ貫之とする裏づけの方が強いから、通説に従つて論を進める。さて、古今集假名序は、異本があるけれども、今は萩谷朴氏の日本古典全書本（鈴木直徳寫陽明家本）によることとして、その本文の用語を分析してみると、いわゆる女性のかな文學語で書かれてはいるが、訓點語もそうとうに交つて注意されるのである。これはもちろん、その種本となつた詩經序や文選序などの訓讀用語を取り入れた點にもよろうが、また、作者の育つた世界、すなわち漢字漢文の素養に基づいていることも見逃せない。因みに、この問題に關しては、築島裕學士の「古今集假名序と漢文訓讀」（東京大學出版會刊・人文科學紀要第七輯）という秀れた業績があるから再説しないが、それによると

あはれぶ・たやすし・たがひに・もろもろの・かくのごとく・そもそも・それ・ここに・たとへば……のごとし・ごとし・しむ・ら・り・よりこのかた・くして・にして・ずして・なづけて……といふ……に似たり……にいたるまで

などの、動詞・形容詞・副詞・接續詞・助動詞・中止法の語尾や、漢文訓讀の世界にだけ見られる特殊の表現形式が取り上げられている。

しかも、假名序の用語は、むしろ女子の日常會話語（いわゆるかな文學語）を基調としている。では、假名序に見られる、これら訓點語を、どう考えたらよいか。思うに、古今集のころ、もしくはそれ以前の成立かといわれ、多分は男性の手になるものかと考えられる、竹取物語・伊勢物語などが、多少の訓點語を交えているとはいえ、多分のかな文學語的であるのに對し、古今集假名序がかなり訓點語を含んでいることについては、それが勅撰集であるという、和文では容易に出せない壯重な表現形式に制約されている點（その構文なり用語が、四六駢儷體の訓讀語であることが、それを語っている）を、考慮に入れる必要がある。でなければ、當代の文章家といわれたほどの貫之のことである。同じく男性の手になつた竹取・伊勢のような文章が書けぬはずはない。假名序も、書こうと思えば、もつとかな文學語的に書けたであらう。とすれば、

假名序の文章は、かなり意圖的だということになる。なお、大井川行幸和歌序からは、あまりはつきりとした訓點語が見られないので、論の對象に入れない。

そういう假名序と、ほぼ同じような訓點語を持つ土左日記である。ならば、土左もまた、意圖的であつたといえようか。しかし、假名序の方は、先に述べたように、勅撰集という枠をつけたものである。それに對して、土左は「身邊の記録」なのである。そこに、假名序とはまた異なつた性格が考えられる。したがつて、假名序と同じような訓點語があるからといつて、土左もまた同じとは必ずしもいえないのである。あるいは、貫之の漢文的素養から、ふと用いられたものであるかも知れない。というわけで、土左のばあい、意圖的かどうかは、改めて別の方向から検討する必要がある、と思うのである。

土左の文章は、口語に近いとも遠いともいわれるが、おおよその見當をつけるならば、貫之は、つとめて口語體によることを意識したのではなからうか。そのことは、(イ)口語的要素をまじえた歌のあること、(ロ)地の文に俗語や方言と思われるものを用いていること、などから察せられる。たとえば

春の野にてぞねをば泣く 若すすきにてきるきるつむだる菜を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ かへらや  
よむべのうなるもがな ぜに乞はむ さらごとをして おぎのりわざをして ぜにももて來ず おのれだに來ず

などに見える傍線の所は、おそらくは口語か俗語と思われるが、これらは俗語であるという意味で除くとしても

照る月の流るる見れば天の川いづる湊は海にざりける。

見わたせば松のうれごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪のなかには雪ぞふりける

追風の吹きぬる時は行く舟も帆手うちてこそうれしがりけれ<sup>⑩</sup>

などの傍線の部分は、口語的表現とみられる。歌において、そうである。地の文で、いを(魚)・および(指)<sup>⑪</sup>・よむべ(夜)・ようさつかた(夜)<sup>⑫</sup>などの、口語あるいは俗語と思われるものや、なぐひ(大波)<sup>⑬</sup>という方言——一月二十九日の條に見える。この語は難解とされているが、香川大學の竹岡正夫氏も氣づいておられるように、波のうねりとか大波という意味の方言と解すべきである——までが現われるのは當然であろう。そこに貫之の意圖がうかがわれるのであるが、それはさておいて、土左の文章が口語に近からうということは、會話の文と地の文との關係をたどることによつてもわかるようである。すなわち、會話の文は口語に近いということを手がかりとしていくと、たとえば、へもはら<sup>⑭</sup>へはや<sup>⑮</sup>とかの副詞、時間的距離を示すへあひだ<sup>⑯</sup>などは、竹取や源氏では男女の性別によることなく、會話のところだけにだけ現われるのであるが、土左では地の文に出てくる。そういえば、二月五日の條の

ぬさにはみ心のいかねば、み舟もゆかぬなり。なほうれしと思ひたぶべきもの、たいまつりたべ。

は、かじとりのことばであるが、この中のへたぶ<sup>⑰</sup>(へたうぶ<sup>⑱</sup>)とも記す)は、平安朝のかな文學語によつて考えるに、ほへたまふ<sup>⑲</sup>に對する、男子系の口語としての色彩の強いことばと考えられる。(源氏や枕草子に、女子のことばとして一例ずつ見えるのを除けば、すべて男子の會話語としてあらわれる。なお、源氏に三か所、へたぶ<sup>⑲</sup>が地の文に出ているが、このうち二か所は、河内本にへたまふ<sup>⑲</sup>とある。因みにへたぶ<sup>⑲</sup>へたうぶ<sup>⑲</sup>は、動詞にも助動詞にも用いられているが、ここでは區別することなく扱つた。)したがつて、土左で會話のなかに用いられるのは當然であるが、地の文にも現われていることを注意したい。次にへいく<sup>⑳</sup>は、雅語を用いるのを本體とする歌では、修辭的に懸詞として使用することどまるところから、口語と考えられているが、それが地の文にも出ているのに合わせて、へたいまつる<sup>㉑</sup>という音便形に注目する必要がある。だいたい、この音便形は、へいく<sup>㉒</sup>と同じく、修辭的に用いられる以外、歌にあらわれず、した

がつて口語と考えられるが、それがやはり地の文に用いられている、ということなどから察すると、土左の文章は、ほぼ口語に近かつたと見てよからうか。もちろん、ここにいう口語とは、いわゆる口語文體による口語の意味であつて、純粹の口頭語をさすものでないこと、いうまでもない。

再び、かじとりのことばに戻ろう。というのは、分析してみると、口語であるはずの、かじとりのことばに、彼にふさわしくないことばが見られるからである。すなわち

「このぬさの散るかたに、み舟すみやかに漕がしめたまへ。」（二月二十六日）

「けふ、風雲のけしきはなはだあし。」（二月四日）

とある、へすみやかにへしめへはなはだがそれである。これらは、特殊のばあいを除いては、原則としてかな文學には現われない、いわゆる訓點語なのである。この訓點語は、當時の知識階級の男子の間で育てられた。したがつて、それは

「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだひざうなり。座を引きて立ちたうびなむ。」（源氏物語・少女）

などでわかるように、博士のことばとして現われるが、宮廷女流の用語ではない。ましてや、かじとりのことばではなかつたようである。へすみやかにの如きは、竹取物語に出てくる、かじとりのことばから推すならば、おそらくは

「み舟はやく漕がせたまへ。」

とでも、あるところではなからうか。そういえば、へしめも問題になる。ここは使役の助動詞であるが、普通ならばへせとするはずのところ。源氏物語では、進士出身の老人とか僧（これもまた、當時の知識人であつた）の會話にしか用いられない。そういう特殊のことばが、かじとりに使われているのである。へはなはだも同様である。とすると、なぜ貫

之は、このような表現をしたかが問題になり、そこに、作者の作爲が感じられることになる。そこで、これらのことばの用いられる場面を、以下に考えてみると

一月二十六日の條は、神佛への祈願という、嚴肅な場面であり、二月四日の條は、舟の運命を左右する権力者としての、ことばである。いかに、かじとりが旅人にとつて頼みであつたかは、「舟に乗りては、かちとりの申すことをこそ高き山とたのめ。」(竹取物語)でわかるうが、さればこそ、貫之もまたへかちとりの心は神のみ心なり、とまで極言したのである。そういう権力者の、今は船を出すか出さないかの、判断のことばであることを注意したい。

そうみてくると、これはかじとりのことばではないが

「そもそもいか詠むだる。」(二月七日)

も注意されよう。こう問いかけた人が、どういう人か、この前後の文からはわからないが、へそもそもが、源氏物語などの例によつて、僧侶などの知識階級に屬する人のことばであることはわかる。とすると、ここは教養ある人の發言とみねばなるまい。ならば、あるいは貫之かとも想像されるが、そうなると、無意識のうちに、ふと口をついて出たとも考えられるけれども、この場面は、童が歌を詠んだことに對する、驚嘆の聲として描かれている點を思いたい。それが、大人をしてへそもそもといわせているのである。いかにも驚異の眼を輝かしている、いささか改まつたけはいの感じられる場面である。

以上、會話の部分を通して考えられたことは、そこに現われてくる、話し手にふさわしくないことばづかいが——具體的には訓點語であるが——、かなり意識的だということである。

では、この意識的な表現は、どういう効果を與えているか。それは微笑とでもいうか、一種のおかしさである。



いつたい、笑いかおかしさは、バランスが失なわれた時に起きるものである。安定が破れたときに、人は笑いに誘われる。おかしさを感じる。思うに、かじとりのことばに、おかしさを感じるのは、つまりは、彼らしくない改まつたことばつかいに基づくのではないか。してみると、貫之は、表現効果を意識して訓點語を用いた、ということにならうか。

このように見てくると、今までふと讀みすごして來た地の文などにも、貫之の意識的な表現がありはしないか、と改めて考えたくるのである。たとえば

かちとり、物のあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなむとて（十二月二十七日）

とあるへくらふの如き。かな文學ならば、へくふあるいはへのむとあるところであらう。げんに、土左日記でも

しうとめやくふらん。（二月九日）

百散を…えのまずなりぬ。（二月元日）

ゆくゆくのみくふ。（十二月二十八日）

とあるのに、なぜこの個所だけ訓點語を用いたのであらうか。思うに、作者はここで、かじとりの行爲に對し、女子の用語すなわち、かな文學語にふさわしくないことばづかいをすることによつて、安定をやぶり、よつて讀者に微苦笑を誘おうと試みたのではなからうか。このかじとりをへ物のあはれも知らでと評していることとも、照應させて考えたいことである。また

二十九日 大湊に泊れり。くすし、ふりはへて、とうそ、白散、酒加へて持てきたり。心ざしあるに似たり。

のへ似たりはどうかであらう。このうち、へくすしは、職員令に「凡國博士醫師、國別各一人」とある、それであらう。その當時は、講師とともに、各國別に一人ずつ置かれたものであつた。その講師に對して、作者はへ二十四日 講師むまのはなむけしに、いでませりと、敬語を用いているのに、ここではそれが無い。そこに、何らかの意圖があるのでな

いか、と想像されるのであるが、この「持てきたり」という常體表現にひきつづいて、「似たり」という訓點語を用いたところに注意したい。普通ならば、「心ざしあるやうなり」とあるところであろう。この、調和を破つた表現。これは、まともな謝意のあらわし方とは違う。人生の裏表を知りつくした人の、しかし、おだやかな批判のことばである。そう思えば、微笑もつかぼう。「似たり」といえば

三十日 神佛のめぐみ、かうぶれるに似たり。

でも、同じことがいえる。ここは、「へからく神佛を祈りて」の結果、鳴門海峡を渡り切つた日のことである。源氏や竹取にない「へからく」を用いているところに、何か改まつた調子を感じるが、波が静かになつたのも、その神佛のおかげだろう、と言つていたのである。ところで、神といえば海の神だろうが、この神は、「ただひとつある鏡をたいまつる」と、たちまちに「鏡の面のごとく」なる、まことに「へいまめく」神であつた。(三月五日の條) そういう神のめぐみ、というのだから、貫之も人がわるい。おかしさを感じずにはおられないであろう。

このように見てくると、わたくしどもは、文體をとおして、作者の心づもりを知ることができる。もちろん、訓點語の用いられているところは、すべてそうだといふのではない。たとえば

この人々ぞ心ざしある人なりける。この人々の深き心ざしは、この海にもおとらざるべし。(二月九日)

などは、先の二十九日の條に似た表現であるが、それでは、「ここにへざる」(普通ならば「へぬ」)が用いられているから、やはり「おかしさ」を出そうと試みたもの、とみていいかどうか、ということになると、問題になる。はじめに「この人々ぞ心ざしある人なりける」と斷定してかかつているからである。これらは、おそらくは、無意識のうちに、ふと平素の素養の訓讀調が、口をついて出たものであるかも知れない。地の文にある訓點語には、そういうたばあいが多いうで

ある。しかも、このばあいには、日記の中でも同じ日の記述のところに、かたまつて現われている。げんに、右の九日の條でも、へおとらざるべし<sup>レ</sup>の、すぐ前に

これかれたがひに、國のさかひのうちとはとて、見送りにくる人あまたがなかに

とある。これらの現象は、あるいは、男子日記ふうの、おおまかな記録が初めにあつて、それを貫之歸洛後に書き改めた(その時には、もちろん、文藝作品として、文體の問題も意識されているが)、そのさいに起きたことかも知れない。そして、へいを不用<sup>レ</sup>(二月八日)は、漢文訓讀に馴れた男子の用語が、たまたま残されたものであろう。

というわけで、土左の文章を見るばあいには、はずみのある考慮を加えなければならないが、しかし、意識的に文體を使いわけているところのあることは認めてよからうか。

だいたい土左日記の文章については、(イ)名文とする人と(ロ)それを否定する人との、兩極端の評価が古くからあり、最近では「さほど彫鏤の苦心が拂われているとは思われない。」(日本古典全書・萩谷朴)とまで言われている。それが當つているかどうか、それは今は觸れないが、とにかく、以上のような見方をしてみると、土左の文章は、一見おおまかなように見えながら、その個々の部分については、文體以外の點に關しても、かなり細かい心づかいがうかがえるように思われる。そこで、そういう方向で、今まで注意されていない點をあげるならば、例えば

ありとある上下章までゑひし<sup>レ</sup>れて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。(十二月二十四日)  
の「が」の用法が、その一つであらうか。もつとも、ここは

一文字をだに知らぬ者<sup>①</sup>しが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

とも解されるが、平安初期のかな文としての立場から、へしが<sup>レ</sup>を、代名詞と連體助詞と見るのが穩やかであらう。へし<sup>レ</sup>

を人代名詞とするものには、へしが身のほど知らぬこそ心うけれ（落窪物語）がある。そういえば、土左日記にへそがいひけらく（二月二十九日）とあるのも、やはりへしへの系統の人稱代名詞であろう。竹取物語にもある。そして、このへがが、いわゆる連體助詞にあたるわけだが、先のへしがへのへがも、これと同類と考えられないだろうか。とすると、このへがは、「あゆひ抄」以下の諸家によつて明らかにされた、尊卑によつて使い分けられる連體助詞、ということになる。この助詞の性格は、へのがが敬意をあらわすのに對し、へがは、輕侮・嫌惡・憎惡などの感情を含めるばあいに用いられると言われ、すでに中世と奈良朝の資料について明らかにされているところであるが、この傾向は、少くとも土左において適用されるようである。すなわち、へしが足はへ一文字をだに知らぬ者へに對し、へそがいひけらくへはへむかし土左といひけるところに住みける女へしかも「方言を使わせている」女に對して、用いてある。そういえば、へそれがうたふ舟唄（二月二十一日）のへがも、へこの間に使はれむとて、つきてくる童へに對して用いられたものだつた。してみると、この助詞の使用をとおして、作者の意識がうかがえることになるか。

敬意をあらわすことば（尊敬語）が、場面によつて變化することは、今も昔も變りがない。

舟をひしたうべりしみ顔には似ずもあるかな。（二月六日）

のへみ顔へは、へみへがあるばかりに、ひどくおかしさがきいている。作者貫之の、ことばに對する感覺は、なかなか鋭い。そういえば

この歌主は「またまからず」といひて立ちぬ。（二月七日）

のへまかるへの處理も、改めて考え直して見る必要があるのではなからうか。昔から問題のあるところだが、(イ)へ又罷らず（もういちど參上しましょう）(ロ)へまだ退らず（まだ歸りません）(ハ)へまた「退らず」を地の文とする）、などの諸説があつて一定しない。このうち、(イ)説は、へまかるへが「貴い所から退下する」の意味であるところから、「も

ういちど參上しましょう」の意ならばへまゐるゝというべきである、という點で難點があり、そこで(口)説が提示されたのであろうが、しかしこれも、「まだまだ歸りませんよ」と言いながら立ち上がったたり、夜ふけであるのにねばつてゐるところは、どうも感心できないということだ、その點で(口)説が生きてくるのだが、それにしては「また」が落ちつかない。というわけで、まだ定説がないのであるが、ここは、謙讓語の用法を誤まつたことによつて、この歌主の教養の低さを示したものと見てはいかかであらうか。だいたい、この歌主は

行く先に立つ白浪の聲よりもおくれ泣かむ我やまさらむ

の迷作を發表し、へいと大聲なるべしゝへもて來たる物よりは歌はいかがあらむゝと、作者から皮肉られている人である。謙讓語のつかい方を知らぬ人として、そうみれば、ふさわしいことになりはしないか。わたくしは、へまたまからんずゝとよんで、右のように解釋しようと思う。とすれば、これも貫之の藝のこまかさを示すことになる。

思うに、右に見られた心づかいは、先に述べた、文體に關してうかがわれたものと、軌を一にする。したがつて、このように見てくると、土佐の文章は、じつに淡々と筆がはこばれていて、それゆえに、一讀生々しい感情は涌いてこないのだけれども、そのことばづかひの一つ一つには、作者の心づもりが隠されていて、感興の盡きぬものがあるのを覺えるのである。

### 貫之は、この日記で何を意圖したか

へ男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなりゝ——この一文は、この日記が傍觀者の立場で書かれてゐることを示すが、そこに描かれてゐるものは、いうまでもなく、貫之が、任地土佐の國を出てから京都へ歸るまでの、旅

の日記であるとはいえ、この一篇を支えているものは、具體的には、子を失なつた親の悲しみ、任はてて京へ歸る時の、舊任地の、あるいは、故郷の、それぞれの人間の心や、歸つてきて、わが家の荒れた姿を、目の前に見て知る人の心など、折に觸れての、人間の心のかなしさである。それらが、人間に徹した鋭い眼で、傍觀者の立場から洞察され描かれているのである。そして、それらを、彼の持つ藝術理念「おかしさ」によつて追究したのが、この日記である、とわたくしは見ている。

この「おかしさ」は、滑稽とか哄笑とかいうことばで、おきかえられるものではない。深く人情の機微を知りつくし、社會人として老成した苦勞人によつて、初めて解しうるものである。だから、貫之の「おかしさ」には、いつも人間のかなしさと、微笑とがつきまとつている。

では、この苦勞は、どこから得たものであろうか。それは、彼が社會的に不遇であつたことにもよるのであろうが、おそらくは地方官として、和泉の國の吏となり、あるいは越前少掾・加賀介・美濃介という、諸國の地方吏を勤めあげているうちに積まれたものであろう。その温厚な苦勞人の姿は、たとえば

かくて京へいくに、島坂にて、人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。(二月十六日)  
と言いなから

これにもかへりごと

したり、京に歸つて、荒れはてたわが家を目前にし、留守居の心なさに失望といきどおりを感じながらも

こよひ、かかることと、聲高にも言はせず。いとはつらく見ゆれど、心ざしはせむとす。(二月十六日)  
という、一事にも見られよう。だからこそ

國人の心のつねとして、今はとて見えずなるを、心あるものは、恥ぢずぞなむ來ける。(十二月二十三日)

こういう人に對しては

これはものによりてほむるにしもあらず。

と辯じてやり、また

聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。(二月十六日)

そういうわが家を見ては、へたよりごとに、ものは絶えず得させゝていただけに、たぶんは怒りに燃えたであらうに、それをあらわに出すことなく

人の心も、荒れたるなりけり。

と、軽くかわすこともできたのであろう。ここでは、もはや、失望から憎しみへうつる、その憎しみはなく、むしろそれをはるかに克服して、一種の「おかしさ」さえも生み出していることを注意したい。

先にあげた、へおのれし酒をくらひつれば(十二月二十七日)、へ心ざしあるに似たり(十二月二十九日)、へ神佛のめぐみかうぶれるに似たり(二月三十日)の各條にあらわれている、それぞれの持つ「おかしさ」、また會話の部分における、異なる文體によつて惹き起こされる「おかしさ」、それらは、ふと讀みすすすと何でもないのであるけれども、考えてみると、これらは、いずれも、苦勞人としての、人生に徹した眼から描かれたものであることがわからう。

思うに、かような表現は、漢字漢文ではなしえないものであつたかも知れない。そこに、へ女もしてみむといわせた理由があつたのであろうが、ことに、この中にあつて「女では書けぬ」文體を用いた、ということは、貫之のいづく文藝美というか、文藝理念といおうか、そういうものを深く掘り下げて描がき出そうと試みている、という意味で注意すべきものと思うのである。

註

(1) 紫式部日記に、次の一文がある。當時の女性の生活の一端を語るもの

といえよう。

ふみどもわざとおきかさねし人(註・式部ノ夫宣孝)侍らずなりにし  
後、手ふるる人もなし。それらをせめてつれづれあまりぬるとき一  
二つひきいでて見侍るを、女房あつまりて、お前はかくおはすれば御  
幸は少きなり、なでふ女か眞字書(註・漢字漢文デ書カレタモノ)は  
よむ、昔は經よむだに人は制しき、としりうごちいふを聞き侍るにも  
……

當時の女性にとつて、漢字で書かれたものに接することは、忌むべきこ  
とであつたのである。

- (2) 延喜七年正月十四日 をとこたうかあり。わたかつけの藏人四人、大  
うへわたりおはします(河海抄卷十引用)。

延喜七年三月二十八日 おとどの御賀を實頼の中將つかうまつれり。  
四尺の御屏風二よろひ、御てをうへにかかせたてまつらせ給ふ(河海抄  
卷十三引用)。

- (3) 原本はないが、それから直接に派生した寫本に四系統ある。定家書寫  
本・爲家書寫本・宗綱書寫本・實隆書寫本である。このうち、現存して  
いるのは定家書寫本。寫した年代も古いが、定家が寫したところに價値  
がある。ただし、誤寫誤脱と思われる所がある。他の三系統は、宗本が  
なく、今日残存しているのは、すべてその子本か孫本ばかりであるが、  
それらのうちで、青谿書屋本は、貫之原本のかなの書體まで忠實に臨模  
したという爲家書寫本の子本で、江戸初期の寫本とはいえ、貴重な點で  
は第一位かとさへ言われる。本稿の引用文も、清谿書屋本である。

- (4) 築島裕 「古今集假名序と漢文訓讀」 東京大學出版會刊・人文科學  
科紀要第七輯。

- (5) この御時(註・村上)には……後に撰すとて、後撰集といふ名をつけ  
させ給ひて……ただし、古今には貫之、此方の上手にて、古をひき今を  
おもひ、行末かねておもしろく作りたるに、今はさやうのことに堪へた  
人なくて……(榮華物語)。

- (6) たぶん、「teppai」だつたか、と思われる。

- (7) <ま欲る>で<はしがる>の俗言か。

- (8) <よべ>の俗言か。

- (9) 平安時代の作品に、貨幣のことが記してあるのは珍らしい。<せに>  
ということばは、民衆につながつていたのである。

- (10) <そありける>とあるべきところ。後撰集(旅の部)に、この歌が出て  
いるが、末句は<海にぞありける>となつてゐる。<ざりける>の用例  
はあるが珍らしい。歌のための音數制限ということも考えられるが、後  
撰集が正統を踏んでいることを思うと、これは、貫之が意識して、歌の  
世界に口語を持ち込んだと考えられないだろうか。

- (11) <つる>は口語。歌ならば<たつ>というべきところ。萬葉集以來の、  
これは傳統である。

- (12) <べらなり>は、當時の知識階級の男子が、訓讀のさい講義の折に用  
いる口語であつた。くわしくは、拙著「訓點資料と訓點語の研究」参照。  
(13) 歌ならば、<箱だにもおかぬかたとぞ>というところではないか。<一  
ぞ>という言い方は、訓點資料や抄物に出る、いわゆる講義注釋口調で  
ある。

- (14) 従来は<うれしかり>とよんできたが、<うれしがり>とする書もあ  
らわれた。それならば、口語である。

- (15) 「和名抄」卷三に 指和名由比俗云於與比 とある。



(10) たぶん、ようさりつかたへようさつつかたよようさつつかたとなつたものである。[r]が促音化したか、表記法が固定化していなかつたため、零表記したのである。

(17) 東條操「全国方言辭典」を見ると、近いところで和歌山縣東牟婁郡、そのほか、宮城・茨城・靜岡に、この語が見える。波のうねり とある。  
(18) 當時の消息文を手がかりとして、そういうことが見える。くわしくは、吉澤義則博士「國語史概説」参照。

(19) 貫之は、かじとりの、彼にふさわしくないことばづかいに、ひどく鋭敏である。一月二十一日の條に

かちとりのいふやう、「黒き鳥のもとに白き浪をよす」とぞいふ。このことば何とにはなけれども、物いふやうにぞ聞えたる。人のほどにあはねばとがむるなり。

とある、最後のことばに注意したい。

(20) 普通には、へからくへはへわたりぬを修飾する、と考えられている。

しかし、連用修飾語がへ神佛を祈りてへという、接續助詞へてを越えて、先の用言にかかるのは無理であるから、このへからくへは、へ祈るを修飾するものと考えた。

(21) この考えに従えば、(1)へしは意味を強める副助詞とするか、(2)仕事師、巫女の意のへ者師という名詞、ということになるが、ここは小西甚一氏の説に従いたい(「土佐日記評解」参照)。

(22) 富士谷成章「あゆひ抄」・土井忠生「近古の語法」・小林好日「助詞ガの表現的價値」・石坂正藏「敬語史論考」・壽岳章子「助詞『の』の一時期」

(23) 青木伶子「奈良時代に於ける連體助詞「ガ」「ノ」の差異について」國語と國文學 第三三九號。

(24) このばあいは、「またまからんず」の撥音が、零表記されていると考える立場。